
ガラスのブルース

義成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラスのブルース

【Nコード】

N5913H

【作者名】

義成

【あらすじ】

とある寂れた町に、一匹の猫と一人の少年がいた。その一匹と一人が、その寂れた町に、音楽という名の希望を与えていく――
――BUMP OF CHICKENの不屈の名曲、《ガラスのブルース》を小説化しました。どうぞお楽しみ下さい。

今からずっと昔の話。ここではないどこかの町での話。
ここはとある国の寂れた町。
そんな町に、一人の少年がいた。

この町に規則や善悪なんかはない。あるのはゴロツキと喧嘩と犯罪だけ。

そんな町にあいつはやってきた。

それは俺が生活費を”盗る”ために下見をしていた時だった。

「ミャー！」

「おお!？」

俺は飛び上がってしまった。声がした方をみると、そこにはブロンズ色の猫が座っている。

「なんだよ…。猫かよ。」

それにしてもこの薄汚れた町に似合わない猫だな。

「とにかく…お前さんの腹を満たせられるもんは生憎^{あいにく}もってないよ。他回ってくんなよ。シッシッ!」

そうやって俺は追っ払った…はずだった。

「ミャー!」

「だあああ！！なんなんだよ！なんでお前はさっきから俺の後ろばかり引っ付いてくるんだよ！」

さっきからこの猫は俺の後ろばかりついて来る。

馬鹿みたいに鳴くので周りが気づき、結局のところ未遂におわつちまう…。

さっきから12件連続失敗継続中だ。

「もうめんどくせっ！！」

今日は撤退だな…。クソッ！」

俺の後ろでこの猫はまだ鳴いてやがる…。しかも嬉しそうに…。ちくしょう…。まだ鳥とかだったら喰えるのに…。猫だもんな…。

そんなこんなで俺の家まで帰って来たんだが…。うわ…。ついてきちゃったよ…。まあ入れてもいいか…。誰もいないし。

俺の母親と父親は死にしまった。父親が兵役で戦争に駆り出されて。母親はそのショックで病気になって。

俺が何歳だなんてわからないから、両親が何年前に死んだなんてこと分かるはずもない。

あえて言うなら…遠い昔のことだ、うん。

「オラ！入れよクソネ…。」

こいつ…許しを得る前に入りやがった。家と呼ぶのにはお粗末なところに住んでいる俺…。

まあとりあえず家の形してることだけ満足しておこうか。

この俺の住居は昔、この町の祭で使った道具をしまっ倉庫だったらしい。

いまじゃ酒と暴力の町だから祭なんか開けないし、意味ないしな。

「ニヤア。」

猫が部屋の隅にあつたものに悪戯してやがる。
あれがいわゆる猫パンチってやつか…。

「…それな。ギターっていう楽器なんだ。俺の父親が持ってたやつなんだよ。」

部屋の隅に立てかけられている埃まみれのギター。
そついやあずいぶんと弾いてないっけな。

俺はいつの間にか、その汚いギターに歩みよって、それを掴んでいた。

そこに座りこみ、一度ジャラン！と鳴らしてみる。
うわっ…。めっちゃくちゃ音ズレてるし…。俺はテキストに音を合わ

せるとギターをジャンジャン弾きはじめた。

あの幸せだった頃の思い出が走馬灯のように俺の頭の中を駆け抜ける。

「ニャー、ニャー！」

気付くと隣にいる猫が、俺が弾き鳴らしている音に合わせて、ニャーニャー鳴いていやがる。リズムにはなっていないが——その歌声はとても綺麗だった。

「お前、歌上手いじゃん。」

俺はその猫の首のところに優しく撫でてやった。

へっ。気持ち良さそうに目閉じてやがる。

俺はなんだか楽しくなり、その猫といつまでも演奏していた。

あれから何日くらい経ったか分からないが、いつの間にか猫の存在は町中のやつらに知られるようになっていた。

どうせ、いろんな奴に胡麻すりまくったんだろ。全く世渡り上手な猫だ。ただ今まで死んでた町が急に活気づいた気がする。

今まで昼間だつていうのに、人っ子一人道にいなかった町に、急に人が出てくるようになった。

見るからに柄の悪そうな兄ちゃんたちも、猫の話題になるとニコニコしやがる。気持ち悪い。

ただ、笑い声がなかった町に、笑い声に戻った。
あの猫のおかげだかなんだかは知らないけどな。

ところで俺と猫はというとな……。

「おうい！クソガキ！早く弾けや！」

「うるせえな、酔っ払いは黙ってやがれ！」

俺がいるのは町の酒場。

俺と猫はなんだか知らないが、ダイエットまでするようになった。
俺がギターの音合わせをしてる中、その猫は行儀よく座ってやがる。
ガラスみたいな綺麗な目が、まるで急かすように、俺の方を見ている。

「よっしゃーやるか！相棒！」

「ニヤッ！」

俺はギターをジャランと掻き鳴らす。

酒場に野次ともななんと分らない声が響いた。

その日はめちゃくちや激しい嵐だった。俺のすみかなんか、もうガタガタ揺れ動いて飛ばされそうになっている。
もう激しい雨やら何やらが、二日ほど続いている。
その間、俺はあの猫を見ていない。

「…あのクソネコ。大丈夫かよ…。」

さすがの俺も心配になってきた。
その時だった。
馬鹿みたいに吹いている風の轟音から、微かにあの歌声が聞こえてくる。

「あの野郎…。まさか…。」

俺は思わず外に飛び出た。

「あいつ。」

俺のすみかの近所の、誰も住んでいない家の屋根にあいつは座っていた。

ビショビショになりながらも、風で飛ばされそうになりながらも、あいつは天高く、大声で鳴いて――いや、歌っていた。

明らかに弱っているのにも関わらず、それにも関わらず、なんだかとても嬉しそうに。

まるで自分の命がここにあることを、天高くアピールするように。

翌朝、今までの嵐なんか嘘のように晴れ渡っている青空の中、俺のすみかのドアの前に、猫はいた。

朝の日差しが、そいつの体についた水滴を照らして、まるで宝石のように光らせている。

なんだか猫は幸せそうに、ドアの前で寝ていた。

俺は猫を抱き上げた。

猫の体は妙に冷たい。俺が抱き上げて、猫は決して動くことはなかった。

まるで、命のかけらを、全て燃やしつくしたみたいに。

これはここではない昔の物語。
とある国に町があった。

その町は、国の中心地から遠く離れているのにも関わらず、とても
陽気で、そして音楽が盛んな町だった。
そんな国に、一人の男がいた。

その男はギターと歌が上手く、その町でも有名だった。
その男が好んで歌う歌がある。
それは、ある一匹の猫のことを歌っていた。
その歌を聞いた人々はこう名付けた。

《ガラスのブルース》

（後書き）

ども音楽と猫をこよなく愛する義成です。

いかがでしたか？ガラスのブルース。

とても読みにくい文章だったかと思いますが、ここまで読んで下さったことに感謝と御礼を申し上げます。ほんとにありがとうございました。

この自分の小説を見て、ガラスのブルースを聞きたくなったと思われたら、この義成、幸いです。

最後に、この小説を読んで下さった方々、ほんとにありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5913h/>

ガラスのブルース

2010年10月10日12時34分発行